



# なごや「聖歌」だより 6月号 '11

## 今月の予定

### 聖歌練習

名古屋:代式後の練習はなし

- ・主日聖体礼儀後、ワンポイントレッスンをを行います。
- ・毎主日朝、発声練習をしています。ご参加よろしく。

半田:今月はお休み

## 名古屋指揮当番

5日エレナ広石、26日ピーメン松島

## ズナメニイ研究会

6月22日1:30から。

グレゴリオチャントが西洋宗教音楽の原点であるように、ズナメニイはロシア聖歌の原点です。ズナメニイを知ることによってビザンティンとの連続性をとらえ、合唱音楽へと発展したロシア聖歌の底にある正教会聖歌の本質をさぐります。また日本語でズナメニイを歌ってみて、古聖歌の魅力を体感してみます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/chant.htm>

## 知って祈ろう - 奉神礼・聖歌入門

### 1. 神の独生の子

#### 礼拝の中で教義を歌う

正教会の聖歌には、神への賛美や祈りの歌以外に教義を教える歌が含まれます。晩祷の「生神女ドグマティカ」、聖体礼儀では「神の独生の子」「信経」が代表的です。

正教会はギリシア語で「オルト・ドクサ」-正しい賛美-と言われますが、礼拝の中で唱えられること、記憶されること、歌われることが、教会の正しい伝統です。異端論争でゆれた頃、その日の聖体礼儀の中で誰が記憶されるかは人々の関心事でした。つまり教会が正しいと認めることは礼拝の中で行うことでした。

ですから今でも、どんなに美しい音楽でも他教派の異なる教義を含む歌を礼拝の中で歌うことはありえません。また「聖堂」は

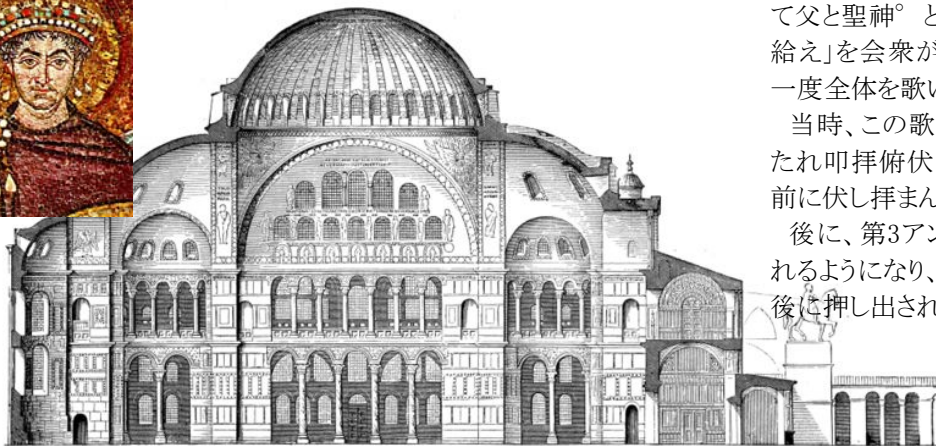
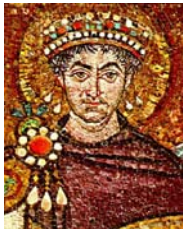
礼拝のために特別に聖にされた場所ですから、正教会の聖歌以外を歌うことは憚られます。逆に、歌詞の内容が正しければ、メロディに関してはわりあい鷹揚で、地域の音楽を取り入れたこともあります。ロシアではヘルビムの歌に「荒城の月」やモーツァルトのメロディを借用した例も見られますが、その音楽が大聖人の雰囲気になさわしいかどうかは別問題でしょう。

さて、「神の独生の子」はユスティニアヌス大帝(在位:527-565)によって導入されました。ユスティニアヌスは為政者として、カルケドン公会議後(451)ぎくしゃくしていたアンティオキア派とアレキサンドリア派の融和を図ろうとしたと言われます。

もともとこの歌は日曜日の第3アンティフォンとして導入されました。歌い方は第1第2アンティフォンと同様で、最初に全体を歌い、次に、ソロが94聖詠の句を歌い、その間にリフレインとして歌の末句「聖三者の一として父と聖神」とともに讃栄せられる主や、我らを憐れみ給え」を会衆が繰り返し、最後に「光栄は」のあとにもう一度全体を歌いました。

当時、この歌に伴う聖詠であった第94聖詠第6句「来たれ叩拝俯伏して・・・」のなごりが「来たれハリストスの前に伏し拝まん・・・」として歌われています。

後に、第3アンティフォンにトロパリなど別の歌が歌われるようになり、「神の独生の子」は第2アンティフォンの後に押し出されて、ここで歌われるようになりました。



ユスティニアヌス帝と  
当時のアギアソフィア大聖堂

### 聖歌の伝統 J.V. ガードナー著 「ロシア正教会の聖歌」から

ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。表はカリストス主教のFestal Menayonを参考にしました。

### 早 課

毎日の祈りの課の中で、歌の要素が豊富なのが晩課と早課です。とくに早課は、祭りの内容や大きさに応じて様々なものが挿入され、祝祭性が大きければ大きいほど、長く複雑になります。主日早課はポリエレイや大頌栄が歌われる大きな祭です。反対に大斎の早課は最も祝

祭的要素の少ない地味な平日早課です。同じ内容の祈祷文も、祭では華やかな音楽付けで歌われ、平日や斎日ではシンプルに読まれます。

時課経は「平日早課」がベースになっています。

**主日祭日早課**

日本を含むロシア系の教会ではエルサレムティピコンに従って、主日早課は晩課や一時課と一体の「徹夜禱」として土曜日の晩に行います。この場合は晩課が終わると、早課の始まりから19,20聖詠、短い重連禱

までが省かれて「六段の聖詠」に飛びます。早課から単独で始めるときは最初から行います。

日本では、かなりの部分が省略されています。この表では薄墨色になっている部分が省略部分です。

**祭日早課**

主 日	祭 日
「我らの神は」「来たれ」19, 20聖詠、聖三～天主經、十字架のトロバリ、重連禱、など	
徹夜禱として晩課に続いて行われる場合は次の六段の聖詠から	
六段の聖詠（第3, 37, 62, 87, 102, 142聖詠）誦読	
大連禱	
「主は神なり」と句。	
その主日の復活トロバリ、聖人のトロバリ、	祭日のトロバリ
生神女讃詞	
聖詠經のカフィズマ二つ。誦する	
各カフィズマのあと小連禱とセダレンを歌う。	
ポリエレイ（第134, 135聖詠）にア rilイヤのリフレインを付けて歌う。またはネポロチニ（第118聖詠）。	ポリエレイ。祝祭的なアンティフォン形式で歌う。
5つの復活のトロバリに附唱「主や爾は崇め讃めらる」（第118聖詠12句）をつけて歌う。	讃歌を歌う。様々な聖詠の句からなるリフレインを付けて。祝祭的アンティフォン形式で歌う。生神女の祭日が日曜日に重なった場合は、讃歌の後5つの復活のトロバリ。
小連禱	
続いて、その週の調のイパコイとポリエレイ後のセダレン。	続いて、祭のセダレンまたはイパコイを歌う。
その日の調3つのアンティフォン（品第詞ステベンナ）をアンティフォン形式で歌う。	4調の第1アンティフォン「我が幼き時より」をアンティフォン形式で歌う。
その調の主日のプロキメン。アンティフォン応答形式で歌う。	祭日のプロキメン。アンティフォン応答形式で歌う。
11の復活福音の一つを読む。	祭日の福音の読み。
復活の歌「ハリストスの復活を見て」を歌う。第50聖詠誦読。二つの短い復活スティヒラを歌う。	50聖詠誦読、祭日のスティヒラを歌う。
祝文「主や爾の民を救い」と「主憐めよ」12回	
カノン 第1、第3歌頌、小連禱。	
その週の調の主日セダレンを歌う。	祭日のセダレンを歌う。
カノン 第4、第5、第6歌頌。小連禱。	
その週の調の主日コンダクとイコスを歌う。	祭日のコンダクとイコスを歌う。
カノン 第7、第8歌頌	
生神女の歌「我心は主を崇め」（magnificat）をアンティフォン形式で歌う。	主宰と生神女の大祭の場合はカノンの第9歌頌に特別の附唱を付けて歌う。他の祭日は「我が心は主を崇め」を歌う。
カノン 第9歌頌と小連禱	
福音の読みに対応する11のエクサポスティラリ。	祭日のエクサポスティラリ（光耀歌）
讃揚歌（第148, 149, 150聖詠）をその週の調で歌う。主日スティヒラ、その日の聖人のスティヒラをあわせて。カノナルフとアンティフォン形式で。最後から2番目のスティヒラは早課の11の福音スティヒラの一つ。最後は生神女讃詞「生神童貞女や爾は至りて讃美たる者なり」。	讃揚歌と祭日のスティヒラ。二つの聖歌隊とカノナルフ。祭日の最初のスティヒラの調で歌う
大詠頌と聖三の歌。アンティフォン形式または両聖歌隊が聖堂の中央に集まって歌う。	
定規のトロバリ。1, 3, 5, 7調は「今救いは世界に及べり」2, 4, 6, 8調の時は「主や墓より復活して」を歌う。	祭日のトロバリを歌う。
重連禱	
増連禱	
司祭と聖歌隊の終わりのやりとり	
発放に続き一時課	